

京都・桂……私のふるさと②

私には、いわゆる《ふるさと》と呼べる懐かしい場所がいくつかある。それは戦前の幼児期から父親の度重なる転勤で、全国を渡り歩いたわが家の歴史的トレースの結果なのである。

本誌前号に結婚して独立するまでの多感な時代を過ごした、ふるさとのひとつ「湘南海岸・鶴沼」について思い起こすままに描いたが、本号ではその鶴沼へ転居する前に、腕白少年が中学生時代を過ごした京都について、印象的な思い出をあぶりだしてみようと思う。

僅か一年半の在住に過ぎなかったが、【古都京都】はいまでも私の心を少年時代のノスタルジアと、無垢なパフォーマンスの思い出が捉えて放さない。

三年前の桜咲く四月甲子園の選抜高校野球で、京都府代表「平安高校」が三回戦まで勝ち上がった。テレビを前に久しぶりに、♪紫匂う雲の彼方～♪と懐かしい校歌を口ずさんだ。

幸か不幸か、私は京都在住の短い間に二度中学校に転入することになった。最初に転入したのが高校野球の名門校「平安高校」の付属中学だった。その当時高校野球の伝統校、「平安高校」の名声と実績は、名実ともに全国でもトップレベルにあり、毎年春夏の甲子園では全国の高校野球ファンの血をわかせていた。野球をやりたい一心で、父にせがんでその名門中学校に転入させてもらったが、同級生野球部員の洗練された練習風景を一目見て、あまりのレベルの高さに忽ち天狗の鼻はへし折られ、自信をなくしてしまった。下手の横好きの野球では、とても太刀打ち出来るようなものではなかった。潔く野球部入部を諦めた。そのことは、高い月謝を払ってまでして、敢えて遠い私立中学に電車通学する必要がないということだった。しばらくして父に説得され、改めて近くの公立中学へ入り直すことになった。

歩いて通える地元の中学校では、当初私は関東弁を口真似されてからかわれもしたが、すぐ遊び仲間に溶け込み、黒帯の同級生を練習で投げ飛ばしたり、部落の朝鮮人下級生と集団対決したり、野球とは別の分野でありあまる少年のエネルギーを発散させた。少年の冒険心と遊び心を満たすには、おおらかな周囲の牧歌的な自然と小川の流れる住環境は申し分なかった。夏は蒸し暑く、冬は濃霧が立ち込めて底冷えする気候は少年の身体にも厳しいものだったが、家族や友人たちの温かいまなざしとふれあいの中で何の不自由もなく、朝から晩まで自然に触れのびのびと遊びまわり、いま思い出しても至福的一幕と呼べる、楽しく奔放な少年期を過ごした。夏は近くの桂川の清流で泳ぎ、秋から冬にかけては嵐山に連なる松尾山中へ入り込み、日暮れまで野鳥を追っていた。周囲には、名所史跡に指定された嵐山渡月橋や、天竜寺、西芳寺（苔寺）、桂離宮などもあったが、子供心には取り立てて興味はなかった。野外で遊ぶことに夢中で、勉強はほったらかして帰宅するとそのまま友だちと、再び学校へ野球に出かけたり、山の中に籠もってカスミ網で「うぐいす」「めじろ」「やまがら」「しじゅうがら」などの野鳥の捕獲に熱を上げていた。

中学校の卒業式を間近に控えた冬のある午後、いつも通り山に入り「めじろ」を捕まえようとカスミ網を仕掛けていた。ちょうどその時、近くで突然「バーン！」と鉄砲の鳴るような大きな音が聞こえた。いまでは宇治市内で手広く商売をやっている、当時のガキ大将、湯浅登喜夫くん（愛称トキさん）が、「あれ？ いのししでも撃ったんやろか？」とつぶやいた。まさかと思ったが、潜んでいたカスミ網の奥から出てきて、ふたりで切割のぬかるんだ細い小道を話し声の方角へ向ったとき、思わず前を見て「ぎょっ！」とばかり仰天した。やや距離こそあったが、その遙か先に手負いの「いのしし」を目にしまったのである。するとなんと一頭の「いのしし」がよるめきながら、われわれ少年ふたりに向かって突進してきたのである。「いのしし」の後から大人の話し声と一緒に、犬のけたたましい吼え声が聞こえてきた。数匹の犬に引きずられるように、ひとりの猟師が小走りに追いかけてきた。

「逃げや！」トキさんの叫び声と同時に私も身を翻し、一目散で元来た道に戻って途中から手前の草付の傾斜地を駆け登った。ところが、その手負いの「いのしし」が今度はわれわれ目がけて傾斜面を登ってきたのだ。「やばいでえ！」必死になって言うように、当にわき目も振らず上へ上へと頂目指して駆け上った。ふと眼下を見たとき、どうしたことか今度は迷った「いのしし」が急に後ずさりして下りだした。そのうちに二～三人の猟師らが「あっちやあ〜」と大きな声でわいわい言いながら、逃げる手負いの「いのしし」を追って通り去った。ともかく一難去ってほっとした。しばらく経ってから降りた小道には、確かに「いのしし」の痕跡であるトレースがくっきり残されていて、ところどころにぽつんぽつんと赤黒い血が滴っていた。トキさんと私は腰を抜かさんばかりのショックに、しばらく呆然としていた。

「いのしし」に出会ってまもなくして私は神奈川県藤沢市に移った。そして三年の歳月が流れ、昭和三十一年私は高校生活最後の夏休みを送っていた。その年甲子園の全国高校野球大会で、幸いなるかな「平安高校」は決勝戦まで駒を進め、豪腕清沢投手を擁する県立岐阜商を破り、三度目の全国制覇を成し遂げた。「やったあ〜」甲子園から遠く離れたわが家のテレビの前で、思わずこぶしを突き上げた。夢中になって母校を応援しながら、嬉しさと感慨無量の気持ちを噛み締めて、♪紫匂う〜♪校歌を口ずさんでいた。テレビ画面では私が舌を巻いた、かつての同級生たちが誇らしげに、栄光の優勝旗を掲げグラウンド内を行進していた。

その後十年ほどして奇しくも私は旅行業に携わることになり、幾たびとなく古都京都の名所旧跡を訪れる機会があった。長男の結納式も京都の日本庭園で挙げた。京都に繋がる「えにし」は途絶えることがない。しかし、【古都京都】は、私にとって歴史文化都市というより、いつになっても「少年野球」や「野鳥狩り」「いのしし」で彩られた賑やかで、やんちゃな少年の懐かしい思い出の地である。